



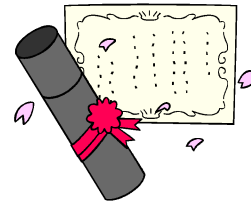
# チャレンジ！一歩前へ

郡山市立橋小学校  
学校だより No.59  
令和7年 2月 3日  
文責：校長 酒井 健

## ◇卒業式の中で、6年生が歌う曲が決まりました。

6年生が卒業式で歌う曲は、「旅立ちの日に」「いのちの歌」に決まりました。2曲とも感動的な曲であり、6年生が歌っている姿を想像しただけで、胸に込み上げるものがあります。

「旅立ちの日に」という曲の歌詞は次のとおりです。素晴らしい歌詞ですね。



実は、この「旅立ちの日に」という曲には、とても感動的な秘話があるのです。今日は、それをお伝えしますね。

旅立ちの日に

作詞 小嶋 登  
作曲 坂本 浩美

白い光の中に 山なみは萌えて  
遙かな空の果てまでも 君は飛び立つ  
限り無く青い空に 心ふるわせ  
自由を駆ける鳥よ  
ふり返ることもせず

勇気を翼にこめて 希望の風にのり  
このひろい大空に 夢をたくして

懐かしい友の声 ふとよみがえる  
意味もないいさかいに 泣いたあの時  
心かよったうれしさに 抱き合った日よ  
みんなすぎたけれど  
思い出強く抱いて

勇気を翼にこめて 希望の風にのり  
このひろい大空に 夢をたくして

※いま 別れるとき

飛び立とう 未来信じて  
はずむ 若い力 信じて

このひろい  
このひろい 大空に

※ 繰り返し



この曲がつくられたのは、1991年のこと・・・今から30年以上前になります。埼玉県のある中学校の校長先生が、荒れていた中学校を建て直そうと「歌声の響く学校」にすることを決めました。最初は、生徒たちは抵抗しましたが、校長先生は、音楽科教諭と一緒に粘り強く努力を続けました。その結果、歌う楽しさによって、その中学校の雰囲気は明るくなってきました。

「歌声の響く学校」を目指して3年目のことです。音楽科教諭は、「歌声の響く学校」の集大成として、卒業する生徒たちのために、何か記念となる、世界に一つしかないものを残したいとの思いから、曲をつくろうと考えました。作詞は校長先生・・・作曲は音楽教諭・・・ついに完成した曲がこの「旅立ちの日に」です。この曲は、当時、その中学校の「3年生を送る会」で歌われていましたが、素晴らしい曲だということが、いつの間にか近隣の中学校、そして全国の小・中学校へと広まり、今では、卒業式の定番とまで言われるようになりました。



その校長先生が、小嶋 登校長先生、そして音楽教諭が、坂本浩美先生です。卒業式当日、6年生の歌う「旅立ちの日に」・・・どうぞ皆様の『心』でお聴きください。

## 校長のひとりごと

明治大学教授の諸富祥彦先生は、心理学が専門で、ご本人がカウンセラーもされており、教育関係の著書も数多く出版されています。

諸富先生の著書の中に、子どもを叱るときに親が注意しなければならない5つのことが書かれていましたのでご紹介します。これは、我々教師も全く同じであります。

- ①大声を張り上げない
- ②感情的にならない
- ③体罰でわからせようとするしない
- ④理由を伝えずに叱らない
- ⑤時間が経ってから叱らない



怒るのは感情ですが、叱るのは教育です。怒りの感情を込めてしまうと、子どもは「自分は嫌われている・憎まれている・愛されていない」と思い込んでしまいます。

根底に子どものことを考えて、子どもをよくしていこうとして「叱る」と、それは子どもの心に響きます。逆に、自分の感情や不満のはけ口として子どもを「怒る」と、子どもの心には響きません。

子どもの悪い行動や習慣を目にしたとき、自分は今「叱ろうとしているのか」それとも「感情的な怒り」なのか・・・一瞬でも考えてみると、子どもに伝わる「叱り」ができるのではないのでしょうか。